



所長・弁理士
藤田考晴 さん
東京工業大学工学部卒。同大学大学院理工学研究科修了。株式会社デンソーの基礎研究所で研究に従事後、大手特許事務所に入所。1998年、弁理士資格取得。約8年の実務経験を経て、2003年「オリブ国際特許事務所」設立。2024年、弁理士法人化。



AIを活用し特許業務のプロセス効率化 特許事務所の創意工夫の活発化を予想

WIPO加盟国総会に参加
特許の分類など技術進化

近年、AI技術の急速な進展は、弁理士の業務にも少なからぬ影響を与えている。2024年9月、マドリッドで開催された「FICPI（国際弁理士同盟）」のオープンフォーラムに参加した「オリブ国際特許事務所」代表の藤田考晴さんは、世界各国の弁理士たちが「AIと特許業務の融合」について活発に議論している様子を目の当たりにしたという。本コラムでは、AI活用による特許業務のプロセスの効率化と、今後の特許事務所における変化の可能性について藤田さんの考察をお聞きました。

先行技術調査の精度と
スピードの向上

特許業務において欠かせない先行技術調査は、従来、データベースにアクセスして所定の検索式を駆使して検索してきましたが、検索式の設定や多数の文献の篩い分けには専門家の経験と技術的勘に大きく依存していました。しかし現在では、自然言語処理を活用したAIツールにより、膨大な文献の中から関連性の高い文献を短時間

AI導入が促す創意工夫と
事務所文化の変化

AIの活用は、単なる業務効率化にとどまらず、特許事務所に新たな創意工夫の機会をもたらします。例えば、AIを活用したクレームのドラフティング支援ツールや、審査官との応答戦略をシミュレーションするシステムなど、独自のツール開発に取り組み事務所も現れ始めています。こうした動きは、従来型の業務から脱却し、知財戦略パートナーとしての付加価値を提供する方向への転換を促すと考えられます。今後は、AIを使いこなす力そのものが、弁理士や特許事務所競争力を左右する重要な要素となっていくでしょう。

AIは、弁理士の仕事を奪う存在ではなく、私たちの業務をより高次元に引き上げるパートナーとなり得ます。今後も、世界の実務家と連携しながら、AIとの共存による新しい特許業務のかたちを模索していきたいと感じたフォーラムでした。

コンフリクトチェックの高度化

で抽出することが可能となり、先行技術調査の助けとなつています。上記の「FICPIフォーラム」でも、多くの特許事務所がこの分野でAI導入を進めていることが報告されました。これにより、出願前の段階でより的確な判断ができ、クライアントに対して迅速かつ戦略的な提案を行うことが可能になります。

特許事務所にとって、代理業務における利益相反の有無の確認（いわゆるコンフリクトチェック）は、非常に重要な業務の一つです。これまででは所内データベースをもとに確認するのが一般的でしたが、AIの導入により、技術分野や企業間の関係性を多角的に分析することが可能となり、より精度の高いチェックが行えるようになります。特に、同業他社間の技術分野の微妙な重なりなど、人間だけでは見逃しがちなリスクにも対応できる点は、「FICPIフォーラム」でも注目されていました。



「FICPI」が開催されたホテル。



弁理士法人 **オリブ国際特許事務所**
オリブこくさいとっきよじむしょ
☎ 045-640-3253
✉ olive@olive-pat.com
📍 神奈川県横浜西区みなとみらい2-2-1 横浜ランドマークタワー37F
http://www.olive-pat.com/

